クロス・ウォー・ゲーム　≪果て無き欲望と儚き願いを胸に宿す者達≫

XXX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロス・ウォー・ゲーム　≪果て無き欲望と儚き願いを胸に宿す者達≫

【Ｎコード】
Ｎ７１５２Ｙ

【作者名】
ＸＸＸ

【あらすじ】
世界は決して一つではない……並行して存在している数多の地球、『パラレルワールド』。その中には、人智を越えた異能の力を持つ者が存在
する並行世界も少なくはない。では、その『異能者』を自分達のいる世界に呼び出し、使役することができたら？　そして自分達の異能者同士を
戦わせ、勝利した『二組』に願いを叶えられる特権が与えられるゲ

ームが
あるとしたら？　これは……自分自身の欲望、願いを叶える為に命を賭けて戦った者達の物語である。

プロローグ　始まる物語

昔、どこかの偉い学者か何かが、こんな事言った。

『世界は決して一つではない。今、我々がいる宇宙とは別固体として幾千の宇宙がある。そしてその宇宙には同じ太陽系と地球が存在する。
しかし、同じ地球といってもどこか違う所が存在するだろう。
何故なら同一ではあるが、別固体でもあるからだ』

正直言って、ありえないな。仮にそんなモノがあったとしても
『俺』には興味ない。俺の名前は『神谷　光』。

ごくごく普通の高校生の筈だったんだが……何の因果も因縁もなく
謎の人外に命を狙われていた。え？　どうしてかって？
んなこと、こっちが聞きたいわ！

俺なんかしたっけ？！　あ、もしかしてアレ中学の時に
ジャ〇プを借りパクした大西君？　ってんなわけないか……大西君、
あんな丸っこくて一頭身じゃないし、仮面つけてないし、何よりれ
っきとした
人間だし！！

そしていつの間にか追いつかれた。
そいつの姿はさっき言ったように丸くて一頭身、体色は蒼く、
手袋のような手には一本の変わった形をした西洋剣。

一見すると何かのマスコットキャラのヌイグルミと思ってしまうが、
ヌイグルミは人を殺さないし、それ以前に動かない。それによく見
てみると
ヌイグルミじゃなくて、れっきとした『生き物』ってのが分かる。

「少年。大人しくしていれば、私は君に危害を加えるつもりはない。
ただ私に関する記憶のみを脳内から消去させてもらうだけで、
君の命を取ろうとは思っていない。だから…むっ！」

丸っこい奴は何かの気配みたいなのを感じて、空を見上げた。
それに釣られ俺も空を見上げた。

魔王。その姿を見て俺は自然とそう思った。
漆黒の色と血のような色の配色に魔性を感じさせる緑色の複眼、
そして何よりその存在感がその場の空気を震わせ、
すべてを圧倒させてしまう。

「これは……なんと運のいいことだろうか。ライフエナジーを
喰らいに来ただけなのだが、こんな所で『異能者≪アブノーマル≫』
に出くわすとは…
面白い……ふん！」

突然魔王みたいなヤツが力んだような声を出し、その上に数本の
紅い西洋剣が出現し、俺と丸っこいヤツを串刺しにしようと

向かってきた。

けど……

「させん！　ハアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

あの丸っこい奴が、俺の前に立ち塞がり、いくつもの剣の攻撃から
俺を守ってくれた。……ってゆーことはコイツ、本当はイイ奴？
そもそも元はと言えば、高校の無い土曜日の今日に何となく
散歩をしていたら、幼い少女の死体と血が滴り落ちるあの変わった
剣を握り締めた丸っこい奴がいて、それでマズイと思って逃げたら
コイツが追っかけて来たんだよなぁ。

正直コイツを信じていいのか？　なんて疑心思考に浸かっていると…

「なっ！　何でッ…！」

丸っこい奴と俺の前に現われたモノ……それは、あの時丸っこいのに
殺された筈の紅いワンピースを着た女の子。その娘に突然、
虹色のステンドガラスの模様が瞳と顎から首に現われ、
その姿を馬のような化け物へと変化させる。

≪キシャアアアアアアアアアーーーーーーーーー！！！！≫

「グッ……ウォオオオオオオーーーーー！！」

馬の化け物がどこからか一本の剣を取り出して、丸っこい奴に攻撃を仕掛けてくる。
その腕力は強いみたいで、少し丸っこい奴が押されてる。
するとあの魔王みたいな奴が……

「ふん…≪シュッ≫」

「！！ッ　グクッ！…」

一本の短剣を飛ばして、それが丸っこい奴の左腕を斬り裂く。
そのせいで形勢が大きく変わり、丸っこい奴が劣勢になった。

「クッ！　てめぇ…何汚い手使ってんだよ！」

「うん？　何だ貴様。人間風情が俺に意見するというのか？」

「ああ、そうさ！　降りて来い！　この≪ブシュウウウウウ！≫

突然俺の身体が切り裂かれ、俺は無造作にその場に倒れる。
なんで身体が切り裂かれたのかは分からないが、これだけは確かな事実だった……俺は今、ここで死ぬ。

「！！ッ　少年！　グワアアアアアアアアアアアア！！」

切り裂かれた少年を見て俺を助けようとした丸っこい奴。
でもその隙をあの馬の化け物は見逃さず、鋭い一閃を繰り出して
丸っこい奴を切り裂き、吹っ飛ばした。

「…ァ…ァァ……」

俺は満身創痍になりながらも立ち上がり、丸っこい奴を助けようと
向かうが……

「ハッ！　コイツは驚いた。まさか見ず知らずの他者を助けようと
するとは……人間とは実に、滑稽な生き物だな！」

「ガハッ！！」

いつの間にか俺の背後に立っていた魔王っぽい奴が、
俺を嘲笑いながら俺の背中を蹴り飛ばす。

（やばい……このままじゃ……あの丸っこい奴が死んじまう！）

俺はそう思った。自分もこんな様なのに他人の心配なんて……
確かにおかしいさ……でも……それでも…俺を助けてくれたあの
丸っこい奴を助けたい。状況からして、今いる場所は廃墟の建物の

広い敷地内……ここは人が来ることなんて皆無だ。携帯も持ってきてないし、助けを呼ぶことは到底出来ない……まさに絶望的な状態だ。だけど……誰か……俺はどうなってもいい。

アイツを……アイツを助けてやってくれ！！

そう心の中で叫んだその時。
突然、俺のポケットに入っていた『カード』が俺とあの魔王みたいなヤツの間に現われたかと思えば、それが黒い稲妻を走らせながら徐々に人の形を形成していく。やがてそれは1人の黒い衣装を纏った凛々しい雰囲気を放つ少女へと姿を変え、俺の方を向いて……

「貴方の心の叫び、しっかりとこの私が聞き届けました。今、この場をもって……私は貴方の剣となり、盾となることを誓います！」

そう力強く宣言した。

「ククク……ハーーハッハッハッハッハッハッハッハ！！
人間のガキぃぃ……よもや貴様もこの『クロス・ウォー・ゲーム』の参加者だったとは！
ハッハッハッハ！　これは驚き痛快だな。……そこの黒い小娘。貴様のアブノーマルとしての実力、試させてもらうぞ！」

魔王が動き出そうとしたその時！

≪グオオオオオオッ！！！！≫

「！！ッ　チィッ！」

いきなりあの馬みたいな化け物が魔王めがけて吹っ飛んでいくが、
魔王のヤツはそれを一振りの拳で粉砕し、
馬の化け物はステンドガラスの欠片となって消滅した。

馬の化け物がふっ飛ばされて来た方角を見ると、あの丸っこいのが
左腕に血を流し、ボロボロの状態で立っていた。

「はァ、はァ、はァ……力が全開でないとはいえ、化生如きにやら
れすぎたな…」

「……ここは引くが次にあったその時は、
貴様等まとめてキングたるこの俺が判決を言い渡す……」

そういって魔王みたいなヤツは、黒い霧みたいな物体になって
その場を去って行った。

残された俺達はホッとする。けどその瞬間、重傷のせいと緊張が
切れたせいで、俺の意識はそのままブラックアウトした。

そこはどこかは分からない。ただ白く何も無い空間という所だけは説明できる。いや、何も無い…というのは不適切だ。

人はいた。その顔は人形のように白く、
瞳はライトブルーとダークグリーンのオッドアイ。
目の前には宙に浮くモニター画面があり、ゆっくりと丁寧な感じで操作している。

「『クロス・ウォー・ゲーム』の参加者は、
異能者≪アブノーマル≫を召喚したばかりの少年を含めて１１人。
とはいえ……まだまだ増えるかもな。強い願いを持つ者はこの私を引き寄せ、私は彼らに願いを叶えるチャンスを与えるだけ……
さぁ、この私に面白く美しい『戦争』を見せてくれ……参加者諸君」

その人…いや男はニヤリと楽しそうな笑みを浮かべ、
ただ淡々とモニターの作業をこなしていた……

『クロス・ウォー・ゲーム』……それは異なる次元に存在する地球
…すなわちパラレルワールドから
異能の力を持った者『異能者≪アブノーマル≫』を召喚し、それら
を用いて戦うゲームである。
最後に残れるのは『二組』のみ。敗北者には『願いを諦めた上での
リタイア』か、
『願いを諦め切れずに死ぬか』の二択しかない……そして今宵、
『第3回　クロス・ウォー・ゲーム』がその幕を開ける！！

さぁ……ゲームという『戦争』の始まりだ！

プロローグ　始まる物語（後書き）

第1話　ゲーム参加の覚悟／動き出す者達

そこはとある西洋風の屋敷。

屋敷内には多くの絵が飾られ、雰囲気的に豪華な物だった。

しかしこの屋敷には今、1人の男しかいないばかりか、静寂が屋敷内を奄々と支配している。

そして男は、自分の部屋で高価なイスに座りながらワインを傾けており、その顔はどこか

楽しそうだ。男がワインの味に悦楽を感じているのをイイことに、あの魔王のような姿の男が

彼の時間を邪魔するようにその姿を現した。

「早いご帰還ですね。収穫の方はいかに？」

「うむ。まあ中々のモノだったな…この街の人間どものライフエナジーは。

それにアブノーマルが二人も見つかった」

「そうですか」

「しかし取り逃がしてしまった。まぁ正確には此方側から引いた、
というのが正しいだろう」

そういって魔王は、『変身』を解除し本来の姿へと戻った……その
服装は
ロックミュージシャンのような風貌で髪型は血のような赤色のオー
ルバック。
その眼の瞳は先程の姿と同様、緑そのモノである。

彼は手に持っていたワインを木材でできたデスクの上に置き、
引き出しからグラスを取り出すと、そのグラスにワインを注ぎ男に
渡す。
渡されたワインを、男はゆっくりと傾けその香ばしい匂いを嗅いで
口に含んでいく。

「クク……うまいな。……そういえば今日は、『乱戦の夜』という企画があったな」

「はい。『ゲーム参加者』全員が一箇所に集まり、小手調べ程度に乱戦を行うというモノですね」

「うむ。今日俺に出くわしたアイツ等も参加するだろう……『殺せぬ』というのは癪だが、

アイツ等に直接俺の実力を見せてやるのも一興というもの。さて、企画の時が来るまで

俺はその辺を散策する……この並行世界、なかなかどうして面白い」

「お気に召して頂けましたか？」

「ああ。いろいろと愛で様もあるというモノだ……では、首尾はまかせたぞ」

「御意…」

男…『アルカード』はそう言うと、黒い霧と化し、窓の隙間から外へと出て行った。

それを確認するや否やなふぅ…っと、溜息を吐いた。

「やれやれ。王様の接待も楽じゃないな……」

誰に言うわけでもなく、1人の男……『刈谷　殊峰』はそう呟いた。

その頃……1人のごくごく普通の高校生『だった』少年は、自分自身に起きた非現実に

眼を疑っていた。目の前にはあの時、自分を助けてくれた黒い衣装

の少女と丸く蒼い一頭身の
仮面の剣士が二人揃って座っており、真剣な様子で見ていた。

ちなみに此処は少年の寝室で、少年…『神谷　光』はベッドで状態を起こした態勢で
二人を見据えていた。

「えっと……とりあえず助けてくれたのと、俺を俺の家まで運んでくれてありがとう。
で……君とその……丸っこい奴は何？」

「丸っこいのではない、私の名は『メタナイト』…それより君はゲームの参加者だったのか？」

「ゲーム？」

「……どうやら知らないみたいですね。なら、尚更説明しなければなりません」

黒い衣装の少女……『キュアブラック』は語り始める。

それぞれどうしても叶えたい願いを持った人間が参加し、並行世界
≪パラレルワールド≫から

異能の力を持った者≪アブノーマル≫を召喚。それらを用いて戦う
生存戦争という名のゲーム。

勝者は『願いを叶えられる特権』を与えられ、敗者は『ゲームのリ
タイア』か『命を落とす』かの

二択のみ……参加者はプレーヤーと呼ばれ、アブノーマルを従者
として使役し、闘いにおいて

サポートをするのが役目である。

そして従者であるアブノーマルには５つのクラスに分けられており、

接近戦を得意とし、体術で敵を屠る『ファイター≪闘士≫』

遠距離戦を得意とし、狙撃によって敵を射る『スナイパー≪狙撃手

≫』

防御力に特化、加えて近距離戦と耐久戦でその力を発揮する『ブローカー≪守護者≫』

理性を喪失させ、狂気によって攻撃性や身体性能を強化させる『クレイジ≪狂乱者≫』

数多の武器を自由自在に操り、接近戦ともに遠距離戦に優れた『コマンダー≪兵士≫』

以上となっている。そしてアブノーマルには、『必殺の一撃』とも言うべき

武器、もしくは固有としている能力『ボルトアーマー』をもっている。

このボルトアーマーによって勝負が決まる場合もあり、戦局を大きく左右する

『一撃必殺』であり、『最終兵器』と言っても過言ではない。

「と、説明すればこんな感じです……何か質問は？」

「……いや、何と言えばいいのか……」

「無理もない。巻き込まれたのも同然でこの『クロス・ウォー・ゲーム』に
参加してしまったからな……しかし何故、君は『サモンカード』を
持っていたんだ？」

「サモンカード？」

『サモンカード』という単語に？を浮かべる光に、メタナイトは丁
寧に説明を始めた。

「サモンカードというのは、アブノーマルを召喚するに必要なカー

ドのことだ。
カードはこのゲームの運営者であり管理者『ウェヤース≪神なる者≫』によって与えられる
筈なのだが……記憶に無いのか？」

「うーーん……確かあの時、オッドアイで変わった服装の男からカードを貰ったんだ。
『来るべき時にそのカードは、異邦の者を招き寄せるだろう』て、言ってそのまま消えたんだ」

「うむ。話からしてその者がウェヤースだろうが……光殿、君はどうするつもりなんだ？
このゲームは『殺し合い』が前提とされている……ゲームへのリタイアは可能だ。
そうすれば君はいつものように日常に戻れる。私としてはその方がいいと思うのだが…」

「……私も同感です。貴方は何も知らずこのゲームに参加してしまった……。

ならば、今すぐにでもこのゲームから退場した方がいいと思います」

メタナイトの提案に、キュアブラックが同意の声を上げる。

しかし光自身、その提案には賛同できなかった…何故なら話を聞けば、

クロス・ウォー・ゲームはアブノーマルを用い互いに殺し合うゲーム。

自分がこのゲームから離脱したとして、その後で彼女とメタナイトはどうなる？

そう疑問に思い、それを言葉として紡ぎ出した。

「……『処刑≪デリート≫』されるでしょう。元もと『願いを叶えられる特権』というのは

言わば一種の不思議な『力』のことで、それを幾つかに分けたモノが私達の

『命』として宿っています……」

「えっ……それってどういう事？」

「簡単に説明すれば光殿、我々アブノーマルは既に死んでいるんだ」

その事実に光は驚愕の表情を浮かべ、メタナイトとキュアブラックを凝視した。

彼自身、二人が死んでいるようには到底見えなかったし、何より死んでいるのであれば

こうやって話をすることもできない。一瞬『幽霊』というキーワードが浮かび上がったが

どうやら違うようだ。

キュアブラックの説明によれば『願いを叶えられる特権』の力を使い、

死んだアブノーマルに『命』を与え、戦う為に生前と同じ肉体を造り出す…簡単に言えば

『死者の蘇生』なので、決して幽霊などの類ではないのだ。

つまり…『クロス・ウォー・ゲーム』というのは、並行世界≪パラレルワールド≫において
何かしらの理由で命を落とした異能者の死者を、こちらの世界に蘇らせる形で召喚し、
殺し合わせ互いの覇を競い合う……そういったゲームなのだ。
それを理解した瞬間、彼…『神谷　光』の決断は早いモノだった。

「俺は『クロス・ウォー・ゲーム』に参加する……俺の恩人の二人が消されるなんて嫌だし、
何より二人を見捨てるなんて、できないしな」

「しかし……！」

反論しようとするキュアブラックに、メタナイトは彼女の前に腕を出して静止させた。

「キュアブラック。彼の眼をよく見ろ。彼の眼には一点の曇りもなく、むしろ一度決めたことは
何があっても覆さない強い信念がある……それは鋼鉄より堅いモノだろう…ならば我々は、
彼が決めた事を反論せず、受け入れるしかない」

「！ッ……分かりました。ならば、もう一度ここに誓いを立てましょう」

キュアブラックはそう言ってゆっくりと立ち上がり、拳を光の前へ突き出して
高らかに宣言した。

「私の名は『光の使者』キュアブラック！　これから貴方を狙う敵を討つ『剣』となり、

あらゆる敵の攻撃から守る『盾』となります。この拳を掲げ、貴方をこの手で守ると誓います！」

今日、この日……極々普通の高校生だった少年は『普通』ではなくなり、

『殺し合い』という日常に、その身を投資する事となった……

場所は変わり、とある一軒のマンションの一室。

そこに紫色をしたツインテールの少女と、赤みがかった茶髪に
赤い特殊スーツのようなモノを着用した少女が部屋に在籍していた。

ツインテールの少女はベッドの上に座りながらテレビを凝視し、
一方の紅いスーツの少女は壁に背を預けながら立っており、
その横には彼女の『一撃必殺の武器』と言える真紅の二又型の槍が
部屋の明かりに照らされ、
光り輝いていた。

そして時刻はもうすぐ5時33分になる……
それを確認したツインテールの少女に視線を移した。

「あと数時間もすれば『乱戦の夜』ね……準備はいい？『アスカ』」

「完了よ『カガミ』。でも『乱戦の夜』ねぇ、……随分とめんどく

さい企画を考えるモノだわ。

このゲームの運営者は」

「でも、この『乱戦の夜』は『お互いの情報収集』という意味合いもあるわ。

うまく他のプレイヤーのアブノーマルから情報を収集できれば、今後の戦いも断然有利に

持ち運べる…まさに一石二鳥ってやつよ」

「フフフ…違いないわね」

「さて、時間になるまで気長に待つとしますか…」

「アぁアアアアぁぁぁアアぁアアぁぁアぁぁアアアアアアぁぁぁアぁぁアアア！！！！」

それは一つの咆哮。いや、『ソレ』を咆哮と言うには、あまりにおぞましく。禍々しく。

地獄に堕ち、多重の苦しみを受ける罪人の断末魔に等しい。

『ソレ』を発した者の正体は1人の少女……身体を包み込むように紫色の煙のような

オーラが包み込み、少しばかり強く吹く風が少女の白い服を靡かせ、

その顔に張り付いた笑みは『狂気』その物。

彼女は理性を捨て、『狂気』によって身体機能と攻撃性を特化し向上させた

アブノーマルのクラス『クレイジ』である。

少女は、ゆっくりと歩みを始め、『乱戦の夜』が行われる戦場へ……狩るべき『獲物』を

狩る為……『狂乱者』たる少女は歩みながら『ある言葉』を呪詛のように詠唱する……

「殺す、殺す………コロスぅぅぅぅぅウウウウウウウゥウゥゥウゥゥゥゥぅウウウゥぅぅぅぁぁぁアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

呪詛のような言葉と怨差の断末魔を放つ少女はまさに、

『怨霊』というに相応しいモノだった……

第1話　ゲーム参加の覚悟／動き出す者達（後書き）

どうも皆さん！ＸＸＸです。

いろいろあったモノの、第一話を更新できましたが、どうでしょう？

一応、自分なりに頑張ったつもりなので愉しんでこの小説を見て頂けると

嬉しい限りです。ちなみに『赤いスーツの少女』と『白い服の少女』は

誰だか分かりましたか？　まぁ赤いスーツの女の子は、いろいろとヒントも

あったので十分に分かると思いますが、白い服の女の子はどうでしょう？

ヒントは『ひぐらしの鳴く頃に』の有名なキャラクターです。

それでは、また次回に！！

現時点での登場人物

【神谷　光（かみやこう）】

年齢／１７歳

特徴／クセ毛のある茶髪のショートヘアー。赤色の瞳。

【備考】

神奈川にある玖尼代市の『旭ヶ丈高校』に通う、普通の高校生『だった少年』。

両親は光が中学生だった頃に死去している。

何も知らず、半分巻き込まれた形で『クロス・ウォー・ゲーム』に参加。

現時点ではまだ、『叶えたい願い』はないモノの、自分を助けてくれた恩人である

『キュアブラック』と『メタナイト』の為に参加し続けている。

【キュアブラック】

年齢／１５歳

特徴／ボーイッシュな髪型　両耳に付けたハート型のピアス（？）

【備考】

かつて闇の魔の手から世界を救った『伝説の戦士　プリキュア』の１人。

光のサモンカードによって召喚され、光のアブノーマルとなっている。

普段は礼儀正しい丁寧な口調だが、激怒したり、感情が一時的に高まると

本来の口調（原作）になる。ボルトアーマーは自分自身の体内に収納している

『漆黒の稲妻≪ブラックサンダー≫』、それを両腕両足に纏わせ防

具、武器とする

『黒き鎧にして武器≪ノワール・ガントレット≫』という技を有する。

【メタナイト】

年齢／不明（おそらく３０代前半…？）

特徴／丸い一頭身という風貌に、自分自身の顔を隠す丸い仮面。

【備考】

プププランドという世界から管理者によって召喚された為、

光に出会うまでプレイヤーがいなかったが、光に出会い彼の人柄に感心し

『2体同時使役』ということで光のアブノーマルとなる。

その剣筋は音速を軽く超え、剣捌きは騎士の名に違わない。

かなりの辛党らしく、ハバネロ（世界一辛いとされる唐辛子）を
難なく生で食してしまう。ボルトアーマーは『ギャラクシア≪銀河
聖剣≫』。
宇宙からエネルギーを集め、それを神速のエネルギーの斬撃『流星
の刃≪ソードビーム≫』
として放つ。

【アルカード（ダークキバ）】

年齢／２７８歳（人間で言えば２９歳）
特徴／緑色の瞳にロックミュージシャンのような格好、手の甲にあ
るキングの紋章。

【備考】

吸血鬼の異名を持つ『ファンガイア族』の初代キング。
性格は自由奔放で傲慢的、自分以外の者は人間、人外を問わず『虫

屑』と称する。
自分の召喚した刈谷に対しても変わらず『虫屑』と称すモノの、かなりの興味を湧かせている。

ボルトアーマーは『闇のキバの鎧≪ダークキバ≫』と『魔を愛する剣≪ザンバットソード≫』。
剣の力と自身の魔皇力を合わせ放つ最大の一撃『ザンバット・エア≪魔を愛する剣の旋風≫』
を得意とする。

【刈谷　殊峰】

年齢／３３歳
特徴／緑と藍のオッドアイ、黒く背中には髑髏の柄が入っているスーツ

【備考】

この男に関しては多くの謎に包まれており、彼の幼少期や今までの
経緯などが
分かっておらず、ただ一つ分かっているのは彼の願いが『不老不死』
だという事だけ……
まさに『怪人物』である。

【クレイジ（本名不明）】

年齢／不明（おそらく１０代）
特徴／煙のような紫色の禍々しいオーラ、青い炎に包まれている真
紅の刀身の鉈を
常時もっている。

【備考なし】

現時点での登場人物（後書き）

これで本作のキャラクラー設定が分かって頂ければ嬉しい限りです。

感想やアドバイス、待ってます！

第2話　乱戦の夜≪前編≫

時刻は8時30分……丁度『乱戦の夜』が始まる時間帯だが、舞台となる戦場…古い木造建ての校舎のグランドには今さっき来た光とキュアブラック、そしてメタナイトの3人しか来ていない。

「ここがその…『乱戦の夜』っていう戦いの場所なのか？」

「はい。『乱戦の夜』での戦闘はあくまで互いの実力を量る為のモノですから、殺し合う必要はありません。」

「それならいいんだけど……」

「仮にもし、我々を殺そうとするプレイヤーがいても、管理者であるウェヤースが止めるだろう。……で、いつまでお前達は隠れてるつもりなんだ？」

メタナイトの突然の発言……それはつまり、この場に誰かがいるという事だ。

そしてその『何者』かはゆっくりと校庭の端にある茂みから姿を現し、ゆっくりと3人に

近付いてきた。それは二人組みの女性で1人は紫色のツインテールに、縞模様のシャツと

スカートを着こなした少女で、もう1人は赤い特殊なスーツみたいなモノを身に纏い

赤みがかった長い茶髪を風に靡かせている。そして何より目立つのが、赤いスーツの少女より

背丈の高い真紅の二又型の槍……おそらくそれが彼女、アブノーマルの『アスカ』が持つ

『ボルトアーマー』なのだろう。

「アブノーマルが二匹……へぇー、『2体同時使役』って奴？　意外と中々やるわね」

アスカが言う『2体同時使役』とは、その言葉通り2体のアブノーマルを使役することである。

しかし、2体同時に使役するというのは決して楽な事ではない。

プレイヤーの役目は『従者であるアブノーマル』の援護……ではあるが、

もう一つの役目がある……それはアブノーマルを自分達のいる世界に留める為に、

『精神エネルギー』を与えることである。その為、精神エネルギーは消費してしまうが

それを2人分も消費するとなると、心身共に大きな負担が掛かる。

しかし、2体同時使役を難なくこなせるプレイヤーは精神や肉体が強靭ということであり、

結果一番の障害として狙われやすくなるだろう。

「ま、何にしても邪魔になるだけの奴等は……この槍の餌食になってもらうだけよ！」

≪ヒュッ≫

高速の槍の一突き。それは速過ぎるモノだったが、それと同等…いやそれ以上の速さで

メタナイトのギャラクシアが彼女の槍の切っ先を防いだ。メタナイトは翼を羽ばたかせながら

黄色い二つの眼でアスカを睨む。

「いくら殺さないよう手加減したとはいえ、いきなり私のプレイヤーの腹部を突こうとするとは…

礼儀と言う言葉を知らないのか？　赤き少女よ！」

怒気を含んだ声音が校庭の隅から隅まで響く……それに対し、アスカはニヤリと楽しそうな

笑みを浮かべ、一気に後方へ下がる。

「生憎。わたしは礼儀なんてモノは持ち合わせてないし、戦いに礼儀なんて愚の骨頂よ！」

「そうか…では、この私が貴様の挑戦を受けて立とう！　ハアァァッ！！！」

剣と槍が交差し激突し合い、両者の槍術と剣術が乱舞する。

アスカは二又の槍で突き攻撃を繰り返し、メタナイトはそれを自慢の剣技でかわしていく。

このままでは無理と悟った彼女は自身のロンギヌスを持ち上げ、『投げる態勢』に入ると同時に

渾身の腕力で槍を投げ飛ばした。飛ばされた槍はメタナイトを確実に捉え、

速度を落とすことなく向かってくる。

メタナイトはギャラクシアを使い、槍を弾き返す形で払おうとするが……

「！！！！　クッ！？」

槍は突如方向を変え、真っ直ぐ前方から右斜めの角度へ素早く移動し、

メタナイトを射抜こうとする。しかし咄嗟に回避した為に槍はメタナイトを射抜くことなく、

地面に突き刺さる形に終わった。そしてゆっくりと、独りでに引き抜かれた槍は主である

少女の手に戻った。

「あっちゃー……今のは行けれると思ったんだけどなァ。やっぱダダじゃ、

取らせてくれないってワケね」

「……（何だアレは、まるで意思があるかのような『あの動き』。あの槍には意思が宿っている

と同時に自立的な移動が可能なのか？　だとすれば……）」

「言っておくけど……この槍には意思はないわ。あくまで私が心で念じて、

その思念波で動いているだけよ？　ブルーボールくん」

「メタナイトと言って貰おう。しかし中々の槍捌きだ……予想では『コマンダー』、もしくは

『アタッカー』辺りなんだが……どうだ？」

「正解。私のクラスは『アタッカー』で接近戦で私の右に出る物は、たぶんいないんじゃない？」

たぶんかい！　そこは自信もって応えろよ！　てゆーか何で疑問系なんだよ！

そんなツッコミを声に出さず、心中で言う光に大対し、キュアブラックも似たような事を

心の中で呟いた。

「なるほど…アタッカーか……しかし妙だ。その槍は明らかに『飛ばす為の槍』なのだろう？

ならば『スナイパー≪狙撃手≫』である筈なのだが…！！まさかクラスを二つ持っているのか！」

「クスッ、またまた大正解。そう…私は稀に見る『ツークラス』のアブノーマルにして、

遠方からの攻撃も近畿からの攻撃も可能とする槍兵。どう？　そこのプレイヤーに劣らず、

私も相当なモノでしょ？」

「確かに否定はできないな。だが其方が『ツークラス』とは言え、此方を甘く見ない方が

いいぞ？　真紅の槍を携えし少女よ！！」

そう言ってメタナイトはギャラクシアを構え、先程より凄まじい剣戟を見せ付ける。

どうやら最初から全力ではなく、小手調べ程度にやっていたらしい。

それに今更ながら気付いたアスカは、今より一層愉しそうな笑みを浮かべては

自らの槍を振るい、突いて。メタナイトを倒そうとする。

一方のメタナイトも仮面の下で笑みを浮かべていた。

まだ全力でないとは言え、自分の剣技をここまで受け流す彼女の力量に感嘆していた。

槍と剣。この戦いは長くなると思われたが、『唐突な出来事の発生』という形で

その幕を降ろすことになる。

「ムッ！」

「これはッ！？」

二人が感じた自分達と同一の気配……それは間違いなく『アブノーマル』モノであり、

ソレは上空からその姿を現した。

「アブノーマルは全部で3体いる……イエス（了解）、即開始する……」

その姿は宇宙人、もしくはミュータントをイメージさせる容姿で、

尻尾は薄い紫色に染まり

他の部位の体色はすべて『白』。ソレは細い腕を振り上げ、いくつかの黒い球体を発生させ

それを一気に投げ付けた。黒い玉の先には光達がいる。メタナイト、

アスカ、キュアブラックの
行動は早いだけでなく俊敏だった。

自分達に襲い来る黒い玉の群れをアスカはあの赤い槍で薙ぎ払い、
メタナイトも同様に自らの剣を使って、黒い玉を容赦なく斬り捨てていく。
そしてキュアブラックは自身の得意とする体術で自分のプレイヤーである光に着弾する前に
玉をすべて撃墜する。

「これで全部か…」

「まったく。人様の尋常な決闘に水を差すんじゃないわよ、そこのミュータント野郎！」

「同感です。いきなり攻撃するなど、戦いにおいての礼儀というモノがないですね……」

「……敵への撃墜は失敗……どうする？……イエス、理解した」

おそらく『心通信≪リリカルなのはで言う念話≫』しているのだろう。

先程から誰かと喋っているような口調で独り言を零している。

すると白いミュータントのような人外は、ゆっくりと校庭の地を踏み、

そして冷静な声音で自らの名を語り紡いだ。

「……私の名は『ミュウツー』……此度の戦いによって召喚され、『コマンダー』の

クラスを有すると同時に今宵、貴様らの力量を測る『計測者』の役割を担う者だ……」

『乱戦の夜』……これはあくまで『小手調べ程度』に乱戦し合うだけの戦いだが、

それでも尚、『死臭』と言う名の香りが校庭の隅々にまで充満していた……

第2話　乱戦の夜≪前編≫（後書き）

今回も早めに更新できました（笑）

ついに『乱戦の夜』が開催されてしまいましたが、いかがでした？

自分的には一応良かったと思うんですが……やっぱり不安ですね（苦笑）

感想やアドバイス待ってます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7152y/

クロス・ウォー・ゲーム　≪果て無き欲望と儚き願いを胸に宿す者達≫

2011年11月26日16時55分発行